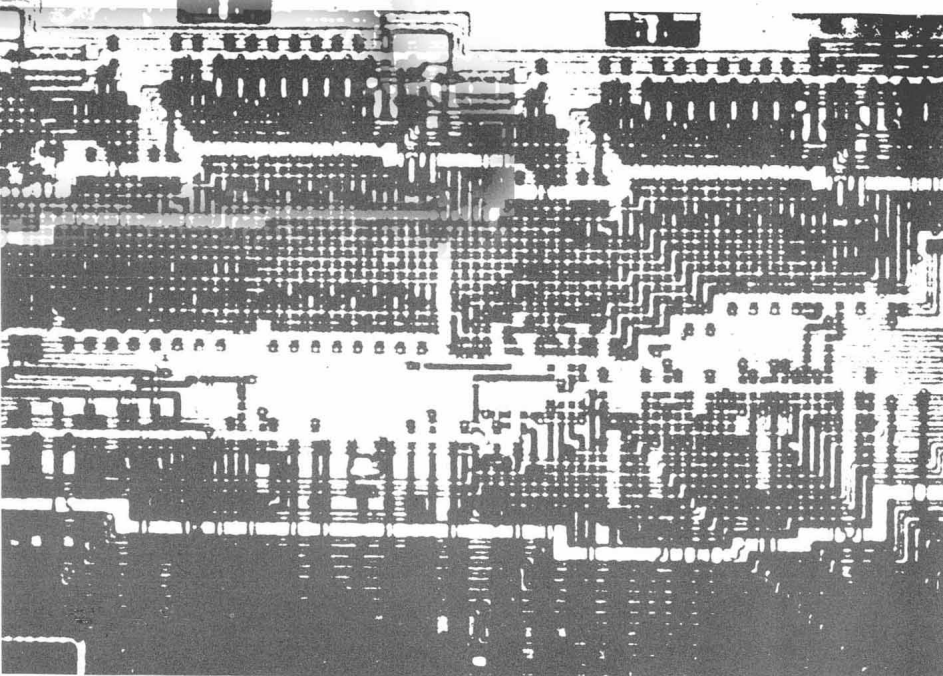




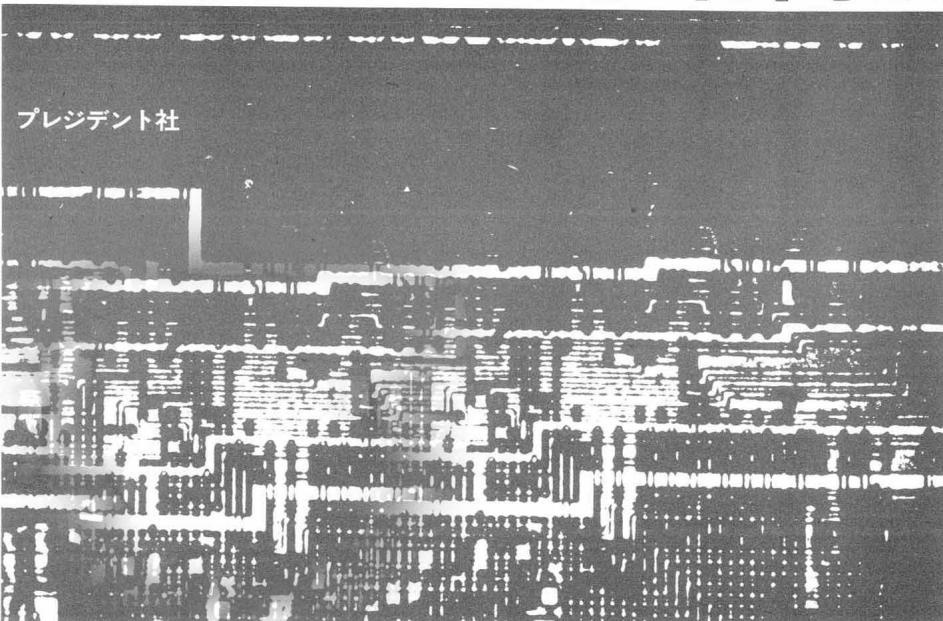
竹内宏

經濟情報整  
理學



# 経済情報整理学 竹内宏

プレジデント社



〔著者略歴〕

竹内 宏（たけうち ひろし）

昭和5年，静岡県に生まれる。昭和29年，東京大学経済学部卒業。同年，日本長期信用銀行入行。現在，同行取締役調査部長，武蔵大学講師を務めるかたわら，気鋭の銀行エコノミストとして，中央公論，エコノミスト等の総合誌に評論活動を展開，独得の視点と文体で多数の読者を得ている。

経済情報整理学

定価 980 円

発行———1982年2月10日 第1刷発行

1982年3月10日 第2刷発行

著者———竹内 宏◎

発行者———本多光夫

発行所———プレジデント社

東京都港区北青山 1-2-3 青山ビル

電話：東京 (03) 478-1411

振替：東京 8-35607

印刷・製本——凸版印刷株式会社

0033-108202-7465

落丁・乱丁本はおとりかえ  
いたします。

日本経済は、いろいろな面から考えることができる。我々の生活の大部分は、経済的行為ともなっており、いわば日本経済のなかにどっぷりと浸っているようなものだ。我々の身の周りには、日本経済を考える材料があり余る程あるはずだ。

マクロ分析は、日本経済を考える一つの方法であるが、それはいろいろある方法の一つに過ぎない。勿論、マクロ分析によって日本経済を考えることができるならば、それに越したことはない。しかし、我々サラリーマンは仕事が忙しいので、経済学をしっかり学び、統計を分析して、マクロ経済のバランスを考えながらその変動を予測する暇がない。

そうになると、我々の周辺の出来事をよく観察して、日本経済を考える素材にしなければならぬ。新聞の三面記事や、テレビの娯楽番組のなかにも、またレジャーに出かけた時でも、注意深くさえしていれば、日本経済の一面を端的に示している材料をみつけることができ、そこから日本経済の動向を考えることができそうだ。いうまでもなく、サラリーマンの仕事は日本

経済と深くかかわっているので、仕事を通じていろいろな側面から日本経済を広く考えることができる。

毎日の生活のなかからよい材料を発見したならば、それを日記につけておくと後で整理するのに便利だと思われるが、私はずばらであって日記をつけていない。しかし、幸いなことに、雑誌社や新聞社から連載を頼まれたり、単発の原稿を頼まれたりする。私はそうした機会に、そのときどきの私の生活や仕事のなかから考えたり、昔の本を読みながら考えたことを書いている。それは、私にとっては一種の日記のようなものである。

私が最近出版した本の大部分は、そうした連載や原稿をまとめたものであり、今回もブレジデント社の武田一美さんのお陰で、最近約一年間のうちに書かれたものを中心として一冊の本をつくることができた。そのなかには、現在から見ると少し訂正した方がよいものもあるが、そのときどきの出来事から何を考えたかということが重要であると思い、敢えてそのままにしてある。

また、「自由民主」の連載記事をまとめた第一章のなかで海外のことに触れたものについては、昨年出版した「民族と風土の経済学」（東洋経済）のなかにもつかったが、ここでは連載をまとめるという意味や、私の「日記」を公開するという主旨から、同じものが収録されている。

この本のなかには、徳川時代における経営論を述べたり、女性問題をとり上げた章もあり、

この分野の専門家からみると大いに異論があるかもしれない。しかし、それらのテーマについても、日本経済と同じようにいろいろな側面からの見方がありうるに違いない。長いサラリーマン生活を続けてきた者が、ごくありふれた日常感覚から考えた結論も、事実の一面を示しているかもしれない。読者の皆さんから御批判や御叱責を賜れば幸甚である。

昭和五十七年一月吉日

竹内 宏

1

# 私の情報整理学

——好奇心を収める「ワク組」をつくる

私の情報整理学……………

情報日記……………

9 17

2

# 江戸学のすすめ

——私の歴史の読み方

佐藤信淵の日本的経営論……………

日本型資本主義の象徴・家訓……………

157 174

### 3

## 日本的経営風土のとらえ方

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 日本的経営風土を考える.....  | 189 |
| やまと言葉の経営学.....    | 195 |
| 日本経済の活力と社会構造..... | 205 |

### 4

## これからの市場を読む

——働く女性と中高年市場

|                     |     |
|---------------------|-----|
| 中高年文化への視点.....      | 219 |
| カルチャー・ウーマンの読み方..... | 226 |
| 働く女性のプライスメカニズム..... | 237 |

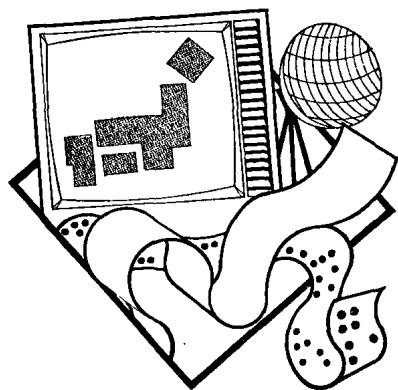


装幀●鈴木邦治 撮影●内藤雅光  
イラスト●没川泰彦

# 1

## 私の情報整理学

——好奇心を収める「ワク組」をつくる





## 私の情報整理学

### 経済現象の見方

いろいろな経済現象をどう判断するかは、はなはだ主観的なものであり、決して高邁な経済理論から演繹的に導かれるものではないようだ。それだからこそ、同じ経済現象に対して、経済の専門家の数だけ判断や対策が生まれるのであり、また、経済理論の専門家は、経済の現状分析には無関心になり、それはジャーナリズムずれたエコノミストの仕事だと考えているふしもある。実際そう思われても仕方がないかもしれない、いくつかの例をあげてみよう。

まず、住宅問題であるが、日本の住宅は貧困だと判断している人と、相当レベルが高いと考えている人がいる。貧困だと判断している人の頭の中には、きっと東京の下町における過密な住宅地帯があり、下町における一世帯当りの床面積や、一人当りの部屋数の統計を使って、貧困さを証明しようとする。これに対して、住宅は豊かになったと考える人は、農村や地方都市

の広い住宅を頭に描いているに違いない。そこでその自家保有率、一世帯当り床面積、一人当りの部屋数の統計を利用して、日本は、ヨーロッパの水準を抜いており、住宅事情が良い国だと結論づけるのである。

もっとも、日本は、アメリカや西ドイツと並ぶ高所得国であるにもかかわらず、フランスやソ連の水準を抜いたと言って満足してはいけない。この先進二カ国と比較すべきだという考え方もあるし、我々が住みたいと望んでいる住宅に比べれば、現在のそれは貧し過ぎるという、贅沢な視点もある。

つぎに、「地方」の問題を考えてみよう。地方の時代と言われているように、今や地方に住む人々の生活水準が相当高くなった。これは、誰でも実感としてわかっていることであるが、統計では、家計支出に占める雑費のウェイトによって確認できる。つまり、生活水準が高くなると、家計支出のなかでレジャーや交際や教養等の費用からなる雑費の比率が上昇していく。この雑費比率は、現在では、地方都市が最も高く、ついで農村、巨大都市の順である。

そうすると、地方の若者は、巨大都市に出て働きたがらない。彼等は、故郷の地方都市や、近くの地方都市で豊かな生活を送りたいのである。そのため、巨大都市の人口の伸びは止まり、地方都市人口はかなり早いテンポで上昇し続けている。

こうした傾向を喜ぶ専門家がいる。つまり、それによって、巨大都市の過密状態が次第に解

消し、多くの人が地方で、充実した生活を送ることができる。また、優れた若者が喜んで故郷に住むようになれば、地方の文化水準は向上するし、地方産業も栄えてくるに違いない。この傾向を嘆く人もいる。先端技術産業は、巨大都市で発達するものだ。巨大都市には、海外の先端情報が集集中しており、優れた若者達が、先端情報が飛びかい、刺激が多い巨大都市に喜んで生活すれば、日本経済をさらに発展させるに違いない。巨大都市に住む若者達が何者かに追われるような気持で生活するなかで、日本経済をリードする先端技術群が開発されるはずであり、また、彼等は巨大都市にやってくる海外諸国の人々と広く接触して、日本経済の国際化の先兵としての役割を果たさなければならない。しかるに、彼等が地方にひっこみ、周囲の環境の改善や市街地の再開発といった小さな問題にとりくむのは、問題だというわけだ。

文化産業の発達についても、正反對な考え方がある。全国の主要都市に、オーケストラ演奏が可能な大ホールが建設され、世界の名画がまじった美術館がつくられ、また若者達は、自ら作詞作曲し、それを演奏して楽しんでいる。中年の人々は、絵画やシルクロードの研究に夢中になったり、ゴルフを楽しんでいる。お年寄りには旅行や俳句や謡に熱心だ。水泳やテニスや釣りも盛んである。そこである人々は豊かですばらしい時代になってきたと言う。

これに反対する人々は、まず、日本をめぐる国際摩擦が激しくなり、エネルギー危機がいつ再来するかもしれない時に、国民全体が、文化を楽しみ、勤勉に働くことを忘れたら大変なこ

とだと考える。また、若い男女が生活をエンジョイする習慣を身につけてしまい、一人か二人の子供しか生まなくなったのを嘆くのである。日本の女性は、一生のうちに平均一・七人しか出産せず、このままでいけば、永遠に若年層の人口は減り続け、日本の人口構造は高齢化し、それどころか、間もなく日本民族の数は減り始め、次第に滅亡過程に入ってしまう。生活が文化的になり、人生をエンジョイするのはよいが、民族が滅亡するのは一大事であり、文化の興隆もほどほどにすべきだというわけだ。

以上、いくつかの例をあげたが、経済現象に対する判断は、その人が蓄積した経済理論から生まれるのではなく、むしろ、それぞれの人生体験や人生観と深く結びついているようだ。それは、理論的ではなく、極めて情念的なものと言えそうだ。

私は、性格や人生体験から、何事にも、硬派の立場をとるというくせをもっている。したがって、住宅問題では、日本の住宅事情は良くなったと判断しており、地方の問題については、若者達が故郷に定住したいと考えるのは、嘆かわしいことだと思っている。文化については、勿論、あまりにも文化が栄えることは問題だと考えている。多分、硬派の体質をもつ人は、私と同じような判断をするだろうし、軟派の人は反対の立場に立つだろう。それは、経済学の知識の深さによって左右されるのではなく、性格や育ちや、今まで読んだ小説の種類と数に関係しているようだ。

## 景気の読み方

景気見通しは、なかなか当たらないものだ。それは、科学的根拠にたって論理が展開されているようにみえるが、実は、はなはだ主観的なものであって、景気に対して、どのような確信をもつかに深く関係している。例えば、今後の景気を見通す時には、つぎのような点が問題になるが、それぞれの問題点について、どう判断するかは、一種の決断である。

まず個人消費をとり上げてみれば、強気の確信をもっている人は、消費者物価が安定しているので、どの世帯でも実質所得が増加してゆき、それにもなって個人消費は順調に上昇するという。これに対して、悲観論者は、つぎのように考える。たしかに消費者物価は安定しているが、これからの景気はだらだらと低迷した状態が続くので、ボーナスも残業手当も増えないだろう。賃金上昇率は、消費者物価が安定しているので、低い水準になるはずだ。したがって、個人消費は伸びないというわけである。

この一つの議論の差を手っ取り早く言えば、これから景気が良くなって、個人消費が伸びるか、あるいは依然として景気は低迷し、個人消費が伸び悩むかということになる。景気が良くなるか悪くなるかを検討するために、個人消費の動向を考えているのであるが、それは景気の動向によって決まるということになれば、問題は少しも前進していないのである。



また、設備投資については、大企業の設備投資が伸びるだろうことについては、多くの論者の意見が一致している。問題は、中小企業の設備投資である。いうまでもなく、設備投資が順調に増加すれば、景気は上昇する。現在では、設備投資の六〇％近くが、中小企業によって占められているので、その動向は、景気に対して重大な影響を与える。

強気の立場に立つ人は、今後景気が回復し、景気観が次第に良くなっていくので、中小企業の投資は伸びるに違いないと言うし、弱気の人は、決して景気観の好転を期待できないので、中小企業は、設備投資を抑え気味の経営を続けるだろうと言う。

設備投資の動向に、大きな影響を与える要因の一つは、長期金利である。間もなく長期金利は下がると判断している人々がいる。アメリカの経済はこれから高金利に耐えかねて、不況に落ち込んでいくだろうから、金融は次第に緩和し、それにともなって円レートは高くなり、日本の長期金利も下るというわけだ。

これに対して、長期金利が下らないと判断する人々の根拠は、つぎのようである。アメリカの景気は、間もなく上昇する。またレーガン政権は、インフレを抑えるため、マネーサプライの量をコントロールするはずであるから、金利は上がるに違いない。日本では多くの人が、金利はアメリカの高金利に引っぱられて、しばらくすると上がると判断しており、そういう時には、長期資金を借りたい人は借り急ぐだろうし、それを貸す方は貸ししる。そのため、長期